

第7回 大学入試のあり方に関する検討会議について

2020年5月14日に大学入試のあり方に関する検討会議が開催された。

14:00から16:30までの予定で、文部科学省3階第1特別会議室で行われた。

今回も前回に引き続きコロナウイルス感染拡大防止で傍聴者は認められず、ライブ配信での中継となった。400人前後の人が視聴していた。今回は音声の中継状況が悪く、全般的に聞き取りづらい状況で、途中音声が完全に途絶えてしまう場面もあった。

今回の議題は以下の通りである。

1. 新型コロナウイルス感染症への対応状況
2. 外部有識者・団体からのヒアリング
3. その他

今回も前回に引き続きWEB会議方式で行われ、文科省の会議室からは三島座長が、他の委員はネットを経由して参加した。萩生田大臣は14:30頃から15:30頃まで1時間ほどの参加であった。また、斎木委員は欠席、清水委員は途中までの参加であることが事務局より伝えられた。

最初に議題1として資料1に基づき事務局より説明があった。令和3年度の総合型選抜(A0入試)及び学校推薦型選抜(推薦入試)の実施にあたって、感染症対策で休校が続いている現状で受験生が不利益を被らないよう大学に対して配慮を求める通知を出したとのことである。また、全体の日程についても今後の状況に応じて適切に対応する。さらに、9月入学についても話題に上っているが、どのような課題があるか検討中であり、あらゆる事態を想定して対応していきたいと述べた。

今回は外部ヒアリングとして、1人15分から20分程度で6名が意見を述べた。その主な発表内容と質疑応答は以下の通り。

- 倉元直樹氏(東北大学高度教養教育・学生支援機構教授):「大学入試学」と称して入試研究と実務に携わる立場から、東北大学の現状を踏まえて意見を述べた。理念からの出発ではなく、出口からの議論が必要である。そして、小問単位で入試状況を分析した結果、ほとんどの国立大学が二次試験で記述式を課しているという現状があり、二次試験を基本として選抜することが重要である。その上で、作題負担の軽減などの支援が必要である。
- 質疑応答:
(両角委員)現状の共通テストは今のままでよいのか、変えた方がよいのか?
→ 日本テスト学会から意見表明をしている。良質なセンター試験が質的な劣化が

心配である。

(柴田委員) 大学入試学が成熟しないのは何が問題なのか？

→ 入試が機密事項であるため、学生が触れることができず養成が困難であることが問題である。

(岡委員) 共通テストと個別試験の役割分担はどうすべきか？

→ 個別試験ですべてを見ることはできないので、基本的な部分は共通テストの役割は大きく、大学が頼っている。共通テストは受験者の学力層が広いが、一方、個別試験は限られた層なのでそれに適した問題を出すことができる。

(清水委員) 初等教育と高等教育の接続の問題に関する部分をもう少し詳しく説明してほしい。

→ 日本語は表記が難しく、CBT での記述式問題の入力方式などは小学校の文字教育と関わる。

(芝井委員) 入学定員と受験者数のバランスの問題をどう考えるか？

→ 東北大学の立場としては発言できるが、全体としてまとめてではなく層化して考えなければ難しい。

- 米本さくら氏(東京都立西高等学校3年): 高校生という当事者の立場から自身の留学経験も踏まえた意見を述べた。英語民間試験の導入は混乱を生むので、大学入試センターが一括して行うべき。入試の変化でも教育に影響はあったが、それと並行して教育改革として4技能を教えるべきである。記述式は共通テストでは採用せず、個別試験で促進するべき。海外で行われているエッセイのように志望理由書などを拡大することもよいのではないか。
- 幸田飛美花氏(山口県立岩国高等学校3年): 地方在住の高校生という立場から当事者の意見を述べた。英語4技能の評価は二次試験でやればよい。導入するとしても詳細な情報を提供できる体制が整ってから始めてほしいし、地域格差も考慮してほしい。入試改革以前に教育改革をするべきではないか。
- 質疑応答:

(末富委員) 受験料や交通費などの費用負担の不安はあるか？高校生の意見を聞くべきだったと思うか？

→ (米本氏) 都心に住む自分はよいが、香川の友人は大変だと言っていた。アンケートなどで高校生の意見を聞いてくれればよかった。

→ (幸田氏) 近い試験会場でも1時間以上かかる。離島の人はずっと大変。当事者として戸惑いや焦りがあり、一番に声を聞いてほしかった。

(島田委員) 入試が教育に与える影響とあるが、ポジティブに捉えているか、ネガティブに捉えているか？

→ (幸田氏) どちらともいえない。授業に偏りが生じ、入試対策がメインになるのはどうかと思う。

- 南風原朝和氏（東京大学名誉教授）：テスト理論の立場から意見を述べた。また、高大接続システム改革会議の元委員でもあり、当時、記述式について反対意見を述べたにも関わらず取り合ってもらえなかった経緯や会議から慎重論の委員が外された様子も語った。英語から発音・アクセント・語順整序問題がなくなったことも問題視した。そして、今回の原因を理論的基盤の脆弱さと後戻りしない姿勢であるとした。
- 質疑応答：
 - （末富委員）理念が傍聴しすぎていると感じる。最低限決めておくべきルールをどう考えるか？
 - 2025年に向けてやらなければいけないことは何なのか峻別すべきである。
 - （吉田委員）4技能の学習やスピーキング力は必要ないと考えているのか？自身の所属する広尾学園の教育は英語教育を推進しており、本日の発言と違うように感じる。
 - 4技能の学習に反対しているわけではない。複数の民間試験を入試に使うのが問題と考えている。広尾学園については特別な狙いをもって一つのやり方としてやっているのだから、それぞれの学校が特色をもって教育するのはよいと思う。
- 新井紀子氏（国立情報学研究所社会共有知研究センター長）：汎用的読解力調査（リーディングスキルテスト）の専門家として意見を述べた。これまでの調査から中・低位層では学ぶスキルが欠如していることがわかっており、科目の知識ではなくリテラシー（読解力と記述力）テストをする必要があると考える。共通テストは国立大向けではなく、ボリュームゾーンの私大向けにするべきである。
- 質疑応答：
 - （両角委員）読解力と記述式をセットでリテラシーと考えるのか？
 - 読むだけだとキーワード検索やリバースエンジニアリングされやすいので、両方を見た方がよいと考える。
 - （小林委員）リテラシーテストも多肢選択式にできるか？
 - 最初は多肢選択式でスタートしてもよい。初期なら多肢選択式でも十分。
 - （末富委員）読解力については小学校から差が開いている。埋め合わせ方についてエビデンスはあるか？学校以外の影響をどう考えるか？
 - 就学援助率が高いほどリーディングスキルテストの結果が低いというデータがある。教科書が読めるようになるようにゼロベースで教えることが貧困サイクルをとめる。それが義務教育の使命であると考えます。
 - （柴田委員）高校ではリーディングスキルが上がらないならば、高校の国語の授業はなんなのか？国立大学は共通テストを資格試験的な意味があるのではないのか？
 - 国語については専門ではないが、高校は読める前提で指導が進められており、読み方を教える時間的余裕がないと考える。共通テストについては資格試験的位置づけでよいと思う。
 - （芝井委員）基礎学力の担保するテストが学びの基礎診断になってしまいテストの力が

なくなって残念に思う。同じように共通テストの組み換えは考えられるか？

→ 国立大学の本丸は二次試験である。共通テストは、多様な大学がある中で、学び続ける力の担保をする役割を担ってほしい。

- 大森昭生氏（共愛学園前橋国際大学学長）：地方の小規模な私学の大学という立場から意見を述べた。理想として考える入試はあるものの、現実には国立大学の滑り止めとしての役割を果たしており、受験しやすい入試にせざるを得ない。地元の高校とも連携しており、個々の学生が頑張ったことを見る入試にしたいと考えている。共通テストの在り方だけでなく、大学入試全体の在り方についても議論してほしい。

- 質疑応答：

（渡部委員）内部進学生と外部受験生あるいは入試の種別で学生の特徴に違いがあるか？

→ 英語に慣れているとか人懐こいなどの性質はあるが、大きな違いは感じない。多様な学生がいる。

（芝井委員）選抜性の高い大学と低い大学は分けて考えるべきと思うか？

→ 東大志望者も本学死亡者も同じテストを受けている。分けて議論してもいいと思う。

（小林委員）共通テストに望むことは何か？

→ センターのみでの入試を行っており、とても良問で使いやすい。受験者の簿数が多く、私学にとってはありがたい。

会議は予定より30分ほど延長し、17:00頃に終了した。次回の第8回会議は6月5日（金）に開催される予定である。時間についてはヒアリング対象者と調整中であり、決まり次第連絡することとなった。